

Title	シンタクシス辺境への視点 : スペイン語の場合
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学論集. 14 p.17-p.36
Issue Date	1996-02-29
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79685
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

シンタクシス辺境への視点：スペイン語の場合

出口 厚 実

La zona fronteriza de la sintaxis española

Atsumi DEGUCHI

Este trabajo tiene por finalidad enfocar algunas construcciones que suelen considerarse fórmulas idiomáticas o expresiones fijas y quedan poco abordadas desde el punto de vista sintáctico. Los fenómenos de los que vamos a ocuparnos aquí no parecen, al menos por primera vista, correlacionados entre sí, pero tienen un común denominador de que llevan consigo una grieta o una sutura visible en su estructura constitucional. Estas construcciones no están excluidas de la sintaxis propiamente dicha aunque sí se hallan a su margen o en la zona fronteriza de este componente de la gramática.

En la primera parte se estudia la caracterización del injerto sintáctico, del que es un ejemplo la llamada “Expresión Indefinida con QU” tratada en Deguchi(1992). Además de la fórmula del tipo no sé qué, que no constituye ningún tipo de expresión fija, se discuten los usos unipersonales del verbo “hacer” seguido del sintagma nominal que significa un transcurso de tiempo, la construcción adverbial a cual más, y otros análogas.

La segunda parte se dedica principalmente a la negación falsa, o seminegación que aparece en determinadas condiciones sintáctico-semánticas. Se propone que la presencia facultativa de la partícula no o el uso de los negativos como nadie, nunca, ninguno se denomine ‘pseudo-negativa’ distinguiéndose de la negativa normal. La pseudo-negativa tiene un papel sintáctico específico en español, aunque sea marginalmente o se limite a la lejana zona fronteriza de la sintaxis, y no se trata de un capricho ilógico ni de “la partícula falsa” como suele llamársela

tradicionalmente.

Se identifica y analiza un subtipo de la pseudo-negativa que se llama ‘oración con no rebajada’ como la siguiente:

¡Cuánta gente no se habrá sacrificado por esas ideas del rango y de la posición social!

0. は じ め に

統語論の守備範囲がどこまで及ぶのかはほとんど誰も明確に答えることのできない疑問であるように思われる。統語論内のテーマとしてしばしば取り上げられる“常客”のような典型的なトピック、あるいは統語論の中心核に据えられる現象が存在することは間違いない。一方、syntaxis がもともと自己完結する確固たる境界をもつ部門と見る見解の立場の分析においてさえ、他の文法領域との交互作用とそれらの間のインターフェースの側面にも様々な角度から考察が加えられて来たのはいうまでもない。

本稿で着目したいと思うのは、従来の統語論で取り沙汰される、紛れもない統語的な問題が意味論や語用論、時には形態論の原理に直接制御されたり、逆に規制を加えるという意味合いでの汽水域、すなわち隣接モジュールとの接触部面の相互の関り合いではなく、通常、統語論の埒外に置かれていたり、忘れ去られているけれども、散発的な特異現象ではなく、制限つきながら、むしろ統語論の一隅（恐らくその辺境地帯であるが）を占めると考えられる構造である。

また通時性の観点からは、以下で取り上げる各種の構文は、一方の極に位置する非文法的な単なる並置 parataxis と、他方の、正常な生産的統語プロセスで生み出されるものとの中間域から離脱し、後者に接近した、いわば統語化途上構文とも呼ばれる性質を持っている。もちろん、両者の間は単純な直線状でないのは明らかである。少なくともスペイン語においては、未熟なあるいは萌芽的な統語手続が関与しているにもかかわらず、いわゆる固定慣用句または cliché に過ぎず特異な語彙が示す異例な事例として片付けられ、統語論の側からは顧みられることのなかった領域がかなり広々と横たわっているのではないだろうか。

1. 「接ぎ木」文

1.1. 不定語と不定 wh 表現

間接疑問文の後部を切り落とした断片、no sé qué「私は何か知らない」が、不定形容詞や不定代名詞が現れるような構造上の位置を占める文は、スペイン語に限らず、かなりの言語に広く観察される、ありふれた現象である。特定の語に固定された表現でないことは、qué「何（の）」に限らず、cuál「どれ」、dónde「どこ」、cuánto「いくら」、cuándo「いつ」、cómo「いかに」

など他の全ての疑問語に対して類似の構文が成り立つことから明らかである。一方、前半部の、no sé「私は知らない」に相当する部分に代わって、同じような意味機能を示す様々な表現が用いられることも、すでに拙稿(1992b)で指摘し、この種の語連鎖を“不定 wh 表現”と名付けた。

日本語の「何か」「どちらか」「どこか」「誰か」「いずれか」「なぜか」「いつか」「どうか」などの一連の不定称代名詞＋「か」の成立ちが、今、問題にしている不定 wh 構造と深い繋がりをもつであろうことは容易に想像できる。

- (1) a. 太郎はどこかへ行った
b. 太郎は [[[どこか] 知らない] X] へ行った

スペイン語の不定 wh 構造は (1b) のボタンを示しており、出口 (1991a, b) の提案に沿って、zero 形の内部型関係詞 X を認める分析を採るならば、(1a) の「どこか」は不定 wh 構造のベースとなった間接疑問文の頭部が残ったものと解釈される。すなわち、この疑問詞を支配する後部の「知らない」、「分からない」など、話者にとっての不明の意味が了解されることになる。

この種の不定 wh 構文は、出口 (1992a, b, 1994) で示唆したように「接ぎ木」文の 1 種であると考えられる。「不知、無知、不明」の意味領域をやや拡大すれば、「不問」「不関与」なども同様にこの亜種とみなせるだろう [Cf.(2)]。

- (2) Óscar necesita ver a un amigo cualquiera, no importa cuál.
「オスカルは誰でもいいから、誰か友達と会う必要がある」 [M.Leonetti, p.15]

また、これまで複文崩れの表現を主に観察してきたが、不定語と疑問語の形態的同一性やその部分類似が言語系統を越えて広く分布する事実⁽¹⁾は、このような媒介項となる接ぎ木構造を中間に仮定することによりいっそう容易に関連づけることができよう。

スペイン語は形態レベルで疑問語と不定語の重なりが顕著に存在しない言語のタイプに分類されると思われるが、それでも 1 部の語彙、例えば cuánto, a, os, as「いくつ、いくら (の)」は、不定冠詞を添えると no sé のような“不定部”の語句なしにそのまま不定数量形容詞に利用することができる。

- (3) a. ¿Cuántos libros tiene? 「彼は何冊本を持っているか」
b. Tiene unos cuantos libros. 「彼は何冊か本を持っている」

両文には、イントネーション曲線とアクセント分布（その一部は正書法に反映されているが）を除けば、日本語においては、「か」の位置だけ、スペイン語では文構成素の語順と unos の存在という最小限度の差しか見られない点に注目すべきである。

仏語での *quelque chose*, *quelqu'un* あるいは *quelque* 単独の不定形容詞用法は、なお疑問詞の働きを棄て切っていない *je ne sais (on ne sait) quel, n'importe quel* における *quel* との間の親近性をさらに確信させてくれる。

また、スペイン語疑問詞 *cuál/cual*（関係詞・代名詞？）にも、その分配的用法と呼ばれる構文には、単独で不定代名詞として機能する場合がある。

- (4) a. Todos ayudaban, cuál trayendo cubos de agua, cuál abriendo zanjas.

[Moliner I, p.816]

- b. Todos ayudaron, cuál más, cuál menos al final feliz.

[Gran Diccionario, p.501]

1.2. 接ぎ木構文

「接ぎ木」は、単に語順が平常でないとか、構造が無標でない“毛色の変った”タイプの文を指すための造語ではない。

- (5) a. No sé qué es exactamente una enfermedad moral.

- b. Qué es exactamente una enfermedad moral no lo sé.

[Una enfermedad moral, p.12]

例えば、(5b) は a. 文に比べて確かに頻度の低い構文かも知れないが、これは直接目的語（節）の主題化（左方転位）を通じて生成され得る正規の語順配置手続きによるものとみなすので、接ぎ木に相当しない。

「接ぎ木」は正常に起こり得る統語操作（あるいは観察者側からみれば現象）であるが、その適用域が非統語、非意味的に制約を受けるとともに、その生成に必要な基本的な統語枠組みがその言語の文法により認可されないケースを指す。上例 (5b) は直接目的語のみならず、主語、間接目的語、斜格目的語、修飾補語、などあらゆる文構成塊を動詞前位に移動する際の一般ルールに則っているが、(6) b, c, d, などが不可能なのは個別の制限によって排除されるのではなく、このような位置に「節」を組み込んでその中の語を句の中心語にする統語的設定そのものが許されないという原則を反映したものと考えられる。

- (6) a. El médico le recetó no sé qué medicina.

- b. *El médico le recetó sólo su madre sabe qué medicina.
- c. *El médico le recetó nunca había usado medicina.
- d. *El médico le recetó sabe bien qué medicina.

その意味で (6a) は非正規な統語手続きとみなされ、この文に通常の文法的な文には含まれない構文的ギャップないしは“断層”が感じられる。

「接ぎ木」の定義としては、前稿 (1992b) を若干修正して、次の規定を与えることにする：

(7)

“文 S_1 の部分構造 P_1 としては生成され得るが、文 S_2 の部分 P_2 としては統語的に不整合な構造を、 P_1 と P_2 の語用論的互換性と、 $[S_2 \text{ マイナス } S_1]$ と P_1 との意味論的再合成可能性の保障の下に、 S_2 において P_2 の一部として P_1 を接合するプロセス”

もちろん、出口 (1992b, 1994) で「接ぎ木」は、その操作の結果、文法的な文を生む場合に利用しているが、言語運用のレベルでしばしば見られる統語的逸脱と同等ではない。もっとも後者には他の文構造の一部を切り取って挿入した、一貫性のない雑多な「一時的交錯」表現⁽²⁾と考えられるものもあり、「接ぎ木」と深底において相通じることを否定しない。

不定 wh 構造に限って見てみても、拙稿 (1992b) で指摘したように、「接ぎ木」とははっきりと認められるような統語断層を含むものから、「接ぎ木」かそうでないか曖昧な構造や、組成は同じだが正常な非「接ぎ木」文も存在する。その多様性の一端と、境界線の不分明さのいくつかの実例を下記に再び確認しておく。

文 (8) は通常の間接疑問文の体裁をなしているとみなすことになら問題はない。しかし、この文脈での意味は、「虹を見ながらなぜかは言った」と解釈されるのがより自然で、“理由が不明だ”ということを言明するのが主目的ではないように思われる。とすれば、表面的な語順からみれば、まったく「接ぎ木」に見えない文でも、実は「接ぎ木」の構造をもつ場合があることを認めなければならない。この文と、間接疑問としか解釈し得ない文 (5a) とを比較すれば、その差がいっそうはっきりと浮かび上がる。

- (8) No sé por qué, viendo el arco iris, dije: «Yo he sentido antes esto en alguna parte.» [Marianela, p.245]

すなわち、上文の *no sé por qué* は後続語列の主文ではなく、単文の修飾補語として一度接ぎ木されて生じた不定 *wh* 構造が、再び主題化されて、*viendo el arco iris, dije* よりも前置された構文と分析される。

(9) *Esto no sé por qué me parecía extraño.* [Cuentos, p.103]

(9) では、間接疑問節 *por qué esto me parecía extraño* の中から、その主語 *esto* が主文の前に主題として取り出されているという解釈も成立つが、この発話の文脈が、理由が不可解であることを伝達するのを趣旨とせず、「奇妙に思われた」の方に重点が置かれている点を考慮すれば、やはり「接ぎ木」が関与した文と見るのが妥当なのではないだろうか？

(10) *No se sabe bien cuándo ni cómo, pero las novedades presentadas en la última edición del Salón Mueble Italiano, celebrada en Milán, dan la sensación de haberse visto ya.* [País Semanal No.69, p.110]

上例(10)で *no saberse+WH* は、後続部と *pero* で区切られているため、一見、後部を切断された独立主節のように思われる。ところが、“何故か、いつかもわからない”と述べている対象は、*pero* 以下の主文述語 *dar la sensación* でなくて、*haberse visto ya* であるはずである。つまり、本来は *de haberse visto ya no se sabe bien cuándo ni cómo* となるべき修飾部が語頭へ突出しているのである。

接ぎ穂は単に *no saber* の 1 人称単数現在形だけであるとは限らず、その主語が明示されたり、あるいは他の副詞的修飾成分まで随行する場合がある。さらに、次例(11)のように時制が主節の過去時制と呼応して一部不完了過去形になることもある。

(11) *Luego hizo Augusto que se le trajera un biberón para el cachorrillo, para Orfeo, que así le bautizó, no se sabe ni sabía él tampoco por qué.*
[Niebla, p.78]

さらに興味深いのは継ぎ穂自体が、接ぎ木操作を一度受けている可能性がある点である。

(12) *A ella deben los pobres qué sé yo cuántas cosas.* [Marianela, p.237]

文(12)の *qué sé yo* は独立して、また挿入句風にもよく用いられる表現であるが、その語用論的価値は“*no sé*”、“*no se sabe*”に通じる。しかし、両者の統語構成は異なっており、構造

上の互換性はない。なぜなら、“no sé”のsaberは直接目的語が指定されておらず、他動詞の目的語と“非接ぎ木的に”、すなわち正常に間接疑問文を導入できる。一方、qué sé yoは既に直接目的語を充足して統語的飽和の状態にあるため、別の直接目的語との結合を許さないはずである。にもかかわらず、cuántas cosasがあたかも目的語であるかのようにこの位置に現れ得るのは、no séとqué sé yoが意味作用として実質的に同じ効果を有すためで、「接ぎ木」としての接合がなされ得るのである。結局、次のような2回のステップで二重接ぎ木が含まれることになる。

- (13) muchas cosas
no sé cuántas (: = muchas) cosas
qué sé yo (: = no sé) cuántas cosas

「不定部」の主語としては1人称単数が最も許容性が高く、1人称複数、se sabe, Dios sabe, quién sabeなども使われるが、それ以外の特定主語を指示すると文法性の度合は極端に低下することを出口(1992a)の調査で確認した。しかし、下例のような、特定3人称主語(前出su madreを承前する)構造も発見された。

- (14) ..., pero su madre se ha ido a ver no sabe quién, y le han apuntado para un capamento de esos del Frente de Juventudes; [La noria, p.42]

不定wh構文は、変異の幅・種類とも非常に豊富な、かなり一般化したパターンであるが、その起源を考える上で次の文は示唆に富んでいる。

- (15) Una noche el conde salió a fumar uno de sus cigarrillos orientales, especialmente traídos del Líbano ¡vaya uno a saber dónde queda eso, como decía Trueba, y a respirar el perfume de las flores,... [La casa de los espíritus, p.177]

「どこにあるのか知らんが、レバノンで買ってきたという東洋のたばこ」としてLíbanoを解説するために挿入されている¡vaya uno a saber dónde queda esoは間接疑問節の内部の動詞とその主語を保持している点で、不定wh構造の前段階というべき状態を示している。

1.3. hacer 接ぎ木文

一般の文法書では動詞hacerの単人称用法とか、非人称表現の1部として言及されるのが常である、「hacer+経過時間」の表現に含まれる特異な性質に、これまで注目されることはほとんど

なかったように思われる⁽³⁾。統語上の異例な振る舞いというよりも、この構文全体を熟語表現として、統語論の埒外に置くことでの合意が成立してしまっていたためであると言ってもよい。

しかし、hace, hacía, hará のように時制表示能力の1部を発揮することができ、形態上も通常の hacer の3人称単数形と同一の姿で現れるこれらの形式を動詞と認めなければならない外的証拠はかなり強固である。もし、hace が動詞であるならば後続の、期間を表す名詞句をその直接目的語と解する道が開ける。そうでなければ、hace を、その後に補語を従える前置詞あるいは他の特殊な小辞と見なさなければならなくなるだろうが、その場合、どうして前置詞に時制変化(らしきもの?)があるのかという疑問が生じる。

一方、このタイプの時間表現に動詞 hacer が含まれると見た場合、説明に窮するのは、なぜ定形動詞+目的語が、裸のままで、すなわち接続詞を仲介させないで、文の1構成要素として働けるのかという理由である。

この種の統語型式がスペイン語文の正常な組成として認められないという原則を緩めて、従属接続詞のない定動詞節を自由に結合することが許されていると分析する根拠は希薄である。スペイン語における様々な従属方式の類型を数量的に調査した出口(1983)では、(16)Bタイプのように hace で始まる部分構造を無視することはできず、他と区別して hacer 節と称する特異な従属形式を設けて、「従属節」の一種にカウントしたものの、それを支配する主文構造に対してどのような位置付けを与えるべきかを示すことが出来なかった。

(16)

A タイプ

- a. ¿Hace mucho tiempo que vives en las minas?
- b. Hace poco que partió el tren.

B タイプ

- c. Ha llegado del campo hace un mes.
- d. Yo vivo hace sesenta años en esta casa de la calle de Fuencarral...[Maribel la extraña familia, <Ueda(1987:476)>]
- e. Hace un momento estaba usted llorando.[Una enfermedad moral, p.33]
- f. Yo soy su lazarrillo desde hace año y medio.
- g. Te estoy esperando desde hace un buen rato.

Aタイプ(主節 hacer 型)と、Bタイプ(従属 hacer 型)の基本的な差は、前者がある事態が生じてからの経過期間そのものを述べるのに対して、後者が、経過時間を示すことによって基準時以前の特定の時点を提示する点にある。「・・・してから(の状態で) x x x 経った」と

「x x x 前に・・・した」の違いは視点の差こそあれ、物理的な時間関係は同一である。

外見上等しい、Aタイプ *hace...que...* を含む文には2種の下位パターンが区別される。従属節で示される状況がある時間継続している例 a. のような場合と、*que* 以下では起点となる事実が述べられ、その時から一定の時が過ぎたことを表す場合がある (cf. b.)。そのため、後者の従属節は実は *desde que* に相当する表現で、それが簡略化された結果だという主張も見られる。(16)a. b. の文は両者の意味構成上の相違がどうであれ、通常の主文従文の構成を呈しているの、特別な支配関係を想定する必要がないように見える。ところが、*que* 節を動詞 *hacer* の主語とみなすことには統語上問題が生じる。この部分を代名詞化すると主格 *eso* ではなく、*de eso* となり、*hacer* の無主語性はB型文の *hacer* と同じであることが判明するからである。つまり、Aタイプ文の従属節も、一般の *que* 構造がそうであるような名詞節ではなく、特別な前置詞を伴わないで補語としてまたは副詞的に機能する節の1種と考えなければならない。

ただし、Aタイプは、Bタイプの従属 *hace* 構造に対して、その母体となるべき原構造であるか否かの疑問は残る。例えば、質問への返答としてはまったく正当な *Hace un mes.* のような文は、本来存在すべき *que* 以下の節が削り取られた不完全な省略文とみなさなければならないだろうか？

もし、この種の語連鎖がそれ自身で完結する十全な意味と構造を有するとみなせるならば、*que* 節を欠くBタイプの成立の前提として必ずしも a, b 文を設定する必要性はないという主張がされるかもしれない。

f. g. では前置詞の直後に定形動詞を含む“文の体裁”をもつ構造が現れており、この形状もまたスペイン語の通常の *syntaxis* の枠に収まらない。ただ、*Hace un mes.* や (16a, b) の中で、“*hacer* 3人称単数形 + x”は「ある出来事が一定の時間の以前に生じた(始まった)ことを示す」という固有の独立意味機能確立していることが明らかである。この意味部分のみを副詞的修飾成分(状況補語)として借りるため、統語的には亀裂を引き起こすにもかかわらず、文形式の断片を接ぎ穂として「接ぎ木」を行い、経過時間を示すことで起点時を計算できるようにしたのが c. - g. の各構文であると分析することができる。

興味深いのは、不定 *wh* 構文の接ぎ木との平行性である。*no sé por qué* を例にとれば、(17) a. の主節としての非接ぎ木連鎖から、副詞的挿入句“なぜかわからないが”やほぼ完全な副詞連語“不思議にも”の接ぎ木構造への関係は、ちょうど(18) a. b. c. のA、B両タイプの *hacer* 構文に相当するのではないかという点である。

- (17) a. *No sé por qué...*
 b. *..., no sé por qué...*
 c. *..., no sé por qué*
- (18) a. *Hace*** que...*

- b. ...hace***...
- c.hace***

「haber + 経過時間」表現

古語が主で、現代では一部の擬古的表現に限られるが、haber を用いる形式 ha(habrá, había) + tiempo が存在する。hacer 構文と共存していた時代には、多少、機能上の差異が認められた模様だが、主節に対する構造上の段差が見られる点では「hacer + 経過時間」と同様な接ぎ木構造と考えられる。

- (19) Murió dos años ha.
- (20) Tres meses ha que alquilamos esta casa. [Diccionario Planeta, p.638]

「ir para + 経過時間」表現

前節の hacer 構文に比べると、より口語的でまた使用頻度は少ないように見受けられるが、動詞 ir を類似の時間経過を示すために利用する用法がある。

- (21) Cocina de artista. Su identidad es simple: Luis García Alvarez, venido a Madrid va para 35 años desde su pueblo asturiano. [País Semanal 69, p.117]
- (22) Tuvo uno, si, señora..., va para cuatro años. [Fortunata y Jacinta, p.384]

1.4. a cual más 構文

接ぎ木構文は多用され磨耗するとその「文」的輪郭がおぼろげになり、ついには固定慣用句や凍結連語となることが十分予想される。その様な固定化へかなり進んでしまっているが、なお、統語的組成の一部を垣間見ることができるのが a cual más 構文である。もちろん、従来からこの表現が sintaxis において議論されたことはないはずであるが、前述のような「接ぎ木」とそれに類する現象を統語論の辺境として考察対象に入れることが許されるならば、単なる特殊な語彙項目の語源問題としてでなく、ここで取り上げるに値すると思われる。

Cuervo 著の Diccionario de construcción y régimen は、このフレーズには動詞 apostar + a に支配された間接疑問節の頭部（前置詞＋疑問詞）とその内部の比較語 más が含まれていると分析している。b,c.の2つの語順のタイプが存在する。

- (23) a. Tres hombres á cuál más rico <= Tres hombres que apuestan á cuál de ellos es más rico.
- b. Tres hombres ricos a cuál más

- c. a cuál más ricos [Diccionario de construcción y régimen,
p.646]

文(24)は、前稿、出口(1991a, 1992b)で示唆したように、(23)a.のような通常の関係節の省略を経由してではなく、Head内蔵型の関係節から生じるとすれば、下記の構造(25)が仮定される:

- (24) Son tres hombres a cuál más ricos.
(25) Son [tres hombres (apuestan) a cuál (es) más rico]_R

関係節_Rの内部に先行詞自体が埋設されていて、動詞 *apostar* と *ser* が顕在化しなかった結果が(24)であると解釈することになる。ただし、スペイン語は(25)に類する関係構文を正常な統語手続きとして裁可しない。従ってこれは擬似合法的「接ぎ木」によるものである。

さらに、次の例(26)–(31)に見られるように、形容詞が *cual* と呼応して単数形になるケースと被修飾語(常に複数形)に一致して複数形である場合の2通りある。恐らく、これは接ぎ木の活着度の差と捉えることができ、後者の方が前者より統語的一体性あるいは成熟度が増している考えられる。すなわち、*a cuál más* が副詞的修飾の連語として固まってしまうと、*rico* は *hombres* と一致する通常形容詞ということになる。

- (26) les encanta el comprarse libros de cocina y hacer recetas a cual más exótica, y cosas así. [Madrid, encuesta 20–495]
(27) imaginaos este paisaje animado por una multitud de figuras de hombres, mujeres chiquillos y animales, formando grupos a cual más pintoresco y característico [Bécquer < Harmer & Norton (1935:255)]
(28) tuvieron media docena de chiquillos a cual más hermoso [Valera < Harmer & Norton (1935:255)]
(29) la mayoría de las señoras...eran...escritoras radicales a cual más revolucionaria. [Pío Baroja < Harmer & Norton (1935:255)]
(30) me expuso en pocos instantes una infinidad de proyectos a cual más absurdos [Palacio Valdés < Harmer & Norton (1935:255)]
(31) , lo que permitía llamar a cada paso para pedir café o una copa a la simpática Maintoni, la dueña de la casa, o a sus hijas, dos muchachas a cual más bonitas; [Cuentos, p.51]

1.5. その他の半従属

意味解釈の上で、上位文と統語的關係を結んでいると認められるが、明示的な接続詞（コネクタ）を欠くケースは口語文で多く観察される。下例では、副詞節の導入マーカーが見えない点はあるが、構造の接着度合からみれば、不定 *wh* 文や従属 *hacer* 構文に比べれば、結合部分の裂け目が目立たない。

- (32) *Larguémonos pronto no pase algo malo.* [Noria, p.210]

動詞 *pasar* の前に *no* が現れるのは、接続詞 *antes de que* が利用されるような意味関係が認められるためであろう。特定語彙の接続語が回復され得る、この種の文構造は接ぎ木に含めず、コネクタの省略された、半従属文とする⁽⁴⁾。

半従属の変種としてさらにいくつかのタイプが発見される。それらの中には、*no sea que* のように定動詞形を含みながらも、固定化が進み語群全体が一塊として接続詞の機能を代替すると考えられるケースもある [cf.(33)]。しかし、*ser* の時制変化を容認する点を考慮すれば、やはり動詞としての地位を放棄してしまったわけではない。

- (33) *Pero no me atrevo a tener esperanzas, no sea que las perdamos esta tarde.*
(Ramsey 1967:425)

‘接続法動詞活用形 + *lo que* (または *wh* 語) + 接続法動詞活用形’は譲歩節を表わすパターンとして確立しているが、最初の動詞の前に *aunque* が了解されているために接続法が出現するとすれば、異種の構造を継ぎ合わせた「接ぎ木」には相当しないだろう。

- (34) *En cuanto salgamos de esta casa, ya no podrías abrir la boca, pase lo que pase, hasta que hayamos cruzado los siete puentes.* [Perla, p.52]
- (35) a. *Sea como sea, yo no quiero contestar el teléfono.* [Cae la noche tropical, p.126]
b. *Sea como fuere, la decisión de mi madre fue una decisión.* [Todos mienten, p.82]
c. *Las ciudades han soportado tan bien el paso de los años como para que Dunham considere que “fuera quien fuera el que diseñó los edificios fue un maestro de la planificación urbana”.* [País Internacional, p.16]

これと類似してやはり譲歩を表わす、‘接続法活用形 + *o* + 接続法活用形’も同様に

aunque と関連づけることが可能な他、接続詞 *o* 自身の機能を利用している（前方の *o* は省略）とみる、あるいは間接命令文の *que* の脱落等、様々な解釈の余地があるだろうが、結果として、これらは半従属の状態を示すことは確かであろう。

(36) Llueva o no llueva, iré.

(37) Masako advirtió con desaliento que Mina—fuera por obedecer las instrucciones originales o por proteger sus propias plegarias—estaba resuelta a no hablar. [La perla, p.65]

1.6. *que en paz descanse*

故人の名をあげた直後に添えられる *que en paz descanse* “安らかに眠らんことを” は、統語的な形状だけから判断すると単純な関係代名詞節を思わせる。*coma* なしに *que* が後続する形式 (b) も珍しくないが、先行詞は限定名詞句であり、実質は説明的な用法である。

(38) a. el señor X, *que en paz descanse*, vivía aquí

b. el señor X *que en paz descanse* vivía aquí

祈願を表わす挿入節として働く準主節としての機能を示すこの連鎖に語句を補ったり、関係節内に願望文を想定すれば一種の省略文と考えることは不可能ではない。

(39) a. el señor X, (deseo) *que en paz descanse*, vivía aquí

b. el señor X, *que (deseo que) en paz descanse*, vivía aquí

願望の内容を含みながら関係節として先行詞を修飾するという、中途半端な、あるいは両者を兼ねたような *que* の特異な使われ方は、むしろ、祈願準主節を関係節の構造位置に接ぎ木したという不整合さの副作用とみなし、*ad hoc* な削除ではなく直截な準合法的統語結合によって生じた考える余地を残している。

II. 否定のプリズム

語彙の内部に潜んでいると考えられる潜在的な否定や、語用論的な様々な否定の意図・意志や微細なニュアンス等の間接的な言語形態への反映を別にすれば、スペイン語では文法構造のレベルで、一般にはっきりと「否定」の効力を持つとみなされる形式はそれほど多くはない。本章でこのような統語的否定能力が備わっていると仮定するのは、否定辞 *no* 及び、一連の否定語

nada, nadie, nunca, ninguno, jamás, ni, apenas, tampoco である。統語的な否定は、一見、明快な論理意味に対応し、その中身は均質一様にみえる。

しかし、これらの語が文（節）の否定機能はおろか句または語に局限された局所的否定機能さえも示さないで用いられる場合が存在し、その中のいくつかを取り上げてみたい。

2.1. 擬似かぶせ否定文

否定語は否定辞 no に先行されないで動詞より後の位置に出現することができないと規定される。が、それに反する (40) のような例がまれに見られる：

- (40) Yo era nadie, un muerto prematuro que todavía no sabe que lo es, una sombra que cruzaba ciudades y ocupaba en los hoteles habitaciones desiertas, leyendo, cuando se desvelaba, instrucciones a seguir en el caso de un incendio.
[Beltenebros, p.54]

一般則を保持するために、上例の nadie は否定語ではなく、“無人”、“正体のわからぬ人間”という語彙内容をもつ名詞と考える逃げ道がある。つまり、別の品詞への転用として処理する方法である。(41) のように、動詞の目的語や補語でない位置に出現する nadie は確かに文の否定作用と無関係に見えるからである。

- (41) Ya era tiempo de irse. De aquella casa de nadie, de aquel paisaje estéril y fronterizo de bloques de pisos coronados por antenas de televisión que ni siquiera se parecía a una ciudad, a Madrid. [Beltenebros, p.149]

しかし、文 (42) や (43) に含まれる nadie, nada は特殊な付加語義を与えられた名詞と分析するのが妥当だろうか？

- (42) Pero seguí inmóvil y guardando silencio en el asiento posterior, mirando calles oscuras y esquinas de barrios deshabitados, semáforos en ámbar que parpadeaban para nadie. [Beltenebros, p.21]

- (43) Entré en el salón para nada, como siempre. [Nubosidad variable, p.102]

- (44) Los días de lluvia me refugiaba en una cafetería desde donde me gustaba ver a la gente cruzar la calle sorteando los coches y los charcos para llegar a ningún

sitio, ...[Primavera de luto, p.185]

- (45) , lo que se traduce en una situación insostenible tanto para el propio afectado como para la familia, y, por extensión, para la sociedad en general, en beneficio de nadie. [País Internacional 9/agosto/1994]

semáforos en ámbar que parpadeaban para nadie の中で、関係代名詞節は否定文でない。点滅していた黄色信号を描写している事実には否定が関与しないためである。しかし、この信号灯の機能が誰にとっても役立たなかったことを述べようとしている点では否定が影を落としていると言ってもよい。ここでも、まさしく否定語の存在を要求するはずの別の意味構造（意味項と述語）、例えば“ello no era para nadie”との交錯が起こり、その一部分が parpadeaban に接ぎ木されたという見方ができる。

同様に (43) で意図されているのは、「居間に入ったけれども無駄だった、どうにもならなかった」ということで、「para no hacer nada 何もしないために」入ったのではないだろう。むしろ、entré en el salón pero ello no fue para nada を表現している。

これらの構文の特色は、その背後に別の否定表現が存在することと関連づけられる点であるとは言え、主文述語である era, parpadeaban, entré 等の語の語彙の意味から誘発されたものでないことは明らかである。適当な名称が思い浮かばないので、(40), (42)–(45) のような肯定文の目的語や補語として否定語が生起する事例を「擬似かぶせ否定文」と呼んでおく。

この種の文は、個別の語彙意味が特殊な隠否性を呼び起こし、間接的に否定作用域を作り出すために、その範囲で不定量化表現が nadie, nada, ninguno, etc. の否定語として出現するケースと区別されなければならないだろう。

- (46) —Es la última vez—dijo—que vas con Mosén Millán a dar la unción a nadie.
[Réquiem por un campesino español. p.40]

この文では、Millán 師と共に「誰か」の終油の秘跡を行ないに行くのは最後だと少年に諫めているところであるが、これが最後で、今後は“誰のところへ”も同行してはならぬ、という禁止の意味が última vez の表現から派生され、última vez que vas => que no vas の近似代替が否定作用域を作り出したと考えられる。擬似かぶせ否定にはこの última vez のような trigger がないのが特徴である。

2.2. noの任意性と二重否定

否定語を擬似かぶせ否定的に使う用法が拡散すると、動詞の否定辞としての no の存在が、任

意的な状態に変化したのではないかと再解釈される余地が生じ得る。特定の言い回し中では、実際、動詞前の否定辞の存在が義務づけられない例を見出すことができる。

- (47) a. Estuvo en nada que riñésemos.
b. No estuvo en nada que riñésemos.
c. Nada estuvo en que riñésemos. Voigt(1977:144)

「もう少しで（危うく）．．．するところであった」を意味する上文で、a. b. c は同じ意味を表現している。上例のように、nada がどの位置に現われても単独で否定を内化した職能を果たせるとすると、no を追加した場合、(48) のように、二重否定になるのか単純な否定文なのか、の曖昧性が生じる。

Kaufman (1973:170) によれば下記の文は 2 義に解釈されるという：

- (48) Sonia no llora por nada.
a. Sonia doesn't cry for nothing. つまらないことで泣かない
b. Sonia doesn't cry for anything. どんなことでも泣かない

類例として、Butt & Benjamin (1988:279) も次の例文をあげている：

- (49) Lo que dice no es nada.
a. what he says is nothing (i.e. worthless)
b. what he says isn't nothing (i.e. it isn't worthless)

例文 (40) の作者は同じ作品の中で、no に先行されない nada の他、単純否定の no...nadie も使用している：

- (50) Ya no era Rebeca Osorio, la que yo conocí, no era nadie, no era más que la inercia de su propio rencor que...[Beltenebros, p.219]
(51) Mal que mal, yo no soy nadie y no tengo derecho a movilizar el cielo con demandas—refunfuñó el ciego. [Cuentos de Eva Luna, p.198]

2.3. no 下がり文

一般に否定の領域とはみなされないところに否定辞（いわゆる「虚辞の no」）や否定語が出現することがある。これが見られる統語環境は非常に狭い範囲に限られ、かつ、このような“擬

似否定”が常に必須になるという義務的な性格をもたないので、現代スペイン語文章語においては周辺の現象であることは間違いないだろう。スペイン語圏で出版される規範文法や多くの参照文典はこの事実を完全に無視するか、せいぜい欄外扱い程度に触れられるだけである。恐らく、このようなコンテキストに *no* や否定語を用いることが、論理的に正統でないという「非嫡出」意識が働いていたのが理由であると想像することができる。

擬似否定にはいくつかの類型がみられるが（参照：「中級スペイン語文法：表現15「否定」：E肯定・否定の裏返し）、この紙面で注目したいのは、(52)のような感嘆文中での動詞を否定する *no* の現れである。

- (52) ¡Cuántas horas no habré pasado en la hamaca contemplando el mar, claro o tempestuoso, verde o azul, rojo en el crepúsculo, plateado a la luz de la luna y lleno de misterio bajo el cielo cuajado de estrellas. [Las inquietudes de Shanti Andía, p.16]

明らかに、この文章は「ハンモックのなかで海を眺めながら長時間過ごした」であって、決して「過ごさなかった」ことを主張するのではない。従って、*no* はまったく不要な否定要素のようにみえる⁽⁵⁾。“虚辞”という命名はまさに理不尽な、このような存在に対して考え出されたのかもしれない。この *no* は2.1節の *no* と同様に擬似否定の1種であるが、無意味な、「虚辞」の *no* ではなく、この位置に現れる理由がないわけではないと考える。同時に、この種の文には *no* の存在にもかかわらず、通常の意味での否定文ではない「半否定文」という新たな資格を与えたいと思う。

上述のタイプの *wh* 語で始まる感嘆文は、その上位にある節の *no sé* あるいは *no se sabe* のような「不知、不明」意味の述語に埋めこまれた間接疑問文の1部であった分析するのがここでの提案である。

- (53) [*no sé* + [*wh*]_s]_s → [*wh* 半否定文]_s

(53)の主節に相当する意味の核心部分である『否定』が、上位文から切り離されて、独立文へと化した旧間接疑問節に“補償的に”混入し「半否定」になると考え、この種の構文を「*no* 下がり文」と名付ける。否定辞 *no* と半否定（擬似否定）文に顔を見せる *no* は外見は同じで区別がつかない。しかし、否定語の場合、半否定文では *no* に先行されないで単独で動詞語位置に立つのが特色である。

- (54) ¡Cuánta gente no habrá sacrificado por esas ideas del rango y de la posición social

que, después de todo, no sirven para nada! [Las inquietudes de Shanti Andía, p.221]

- (55) Cada montón de basura es un enigma. Dentro de él ¡cuántas cosas no hay!, cartas de amor, letras de comerciantes, rizos de mujeres hermosas, periódicos revolucionarios, periódicos neos, artículos sensacionales, restos, sobre todo, de la tontería humana. [Cuentos, p.108]

例えば、(56) では interesarle の主語節は yo sea doctor de algo の半否定に相当するものとして用いられている。

- (56) ¿A quién puede interesarle que yo sea doctor de nada? [Historia de Elio, p.9]
(57) (…), hablan de que están inventando una vacuna, ¿pero quién ha vacunado nunca a las abejas? [Nubosidad variable, p.49]
(58) ¿Qué más sugestivo ni más delicado obsequio podían hacer los chapelaundis del Bidasoa a la capital de cantón bidasotarra? [Cuentos, p.241]
(59) ¡Y quién se atrevía a decir nada a aquella mujer tan serena, tan impasible! [Cuentos, p.251]
(60) ¡Por qué iba a defender a nadie cuando no le defendían a él? [Cuentos, p.72]

文法書・辞書などで慣用固定表現として引用される ¿qué no daría... ¿qué no diría (dirá) の中に出現する否定辞noも前掲の「no下がり文」の類型に含めることができるであろう。

- (61) a. ¡Qué no daría yo para poseer una vez tan maravillosa! (Ramsey 1967:214)
b. ¡Qué no daría yo por ir a Europa este verano! (Solé y Solé 1977:392)
(61) a. ¡Qué no diría tu mujer si lo supiera! (Solé y Solé 1977:392)
b. ¡Qué no dirá Europa al oír tal escándalo! (Ramsey 1967, p.214)

結 論

統語的逸脱はたとえ軽微なものでも、文法性の判定に直ちに影響を与えるので、意味的成分の共起可能性・不可能性よりも明確な内部基準に基づくものと推定される。一方、正規の文構成法から見ると明らかに異例であるにもかかわらず容認され、従って“文法的な”構造に含めなければならないようないくつかのタイプの語連鎖が存在する。

筋書き通りの脚本に則って産まれる通常の文構造に比べれば、ad lib として加えられる「非正規」な台詞にたとえられる周縁的現象である。限られた語彙項目に対してのみ、局所的な意味条件下に、常態では認められないはずのこのような構造、または構造の組み込みが許容される現象を一般的な統語規則とどのように整合させるかは、幾通りも解決法が考えられるテーマで、それらの比較・検討を論じなければならないし、また、さらに細部を煮詰めなければならない。本稿は、それらの中で、「接ぎ木」を中心に、局所的に働く何らかの統語操作でそれらがコントロールされるのではないかという見方を示したが、この種のアプローチへの問題提起となり、将来の発展へつなぐべきデータの一端として役立てれば幸いである。

[注]

1. Deguchi (1985) で14言語について、疑問語、否定語、不定語、関係詞、補文標識、指示代名詞、etc.の語形の平行性を調べたが、12言語で疑問語と不定語の形態的一致または部分共有を見出すことができた。
2. 例えば、次の A Estados Unidos ha sido の主語になり得ないが、質問内容から el viaje が省略されていることがわかる。
—Cuéntanos algo de tus viajes. El de bodas. Después el viaje a Estados Unidos que has hecho.
—A Estados Unidos ha sido muy interesante. [Sevilla. p.83]
3. Porto Dapena (1983) は例外で、歴史的考察を含めかなり詳しく分析をしている。しかし、特に que を伴わない hacer+tiempo の統語的地位については、従来、文法家が副詞従属節と呼んでいるものとは異なる別タイプのものであるとか、sintagma oracional autónomo であると、評しているにとどまる。
4. 出口 (1983) で que で始まる願望文・間接命令文を指すために用いた用語「半従属」は「準主文」と呼び変える方が適切と思われる。
5. 感嘆文に統語的否定は不要であるどころか、相容れないと考えるのがより妥当であるかもしれない。形容詞・副詞の程度に対する量化の極小化としては、poco が使用される：
¡qué poco trabaja Juan!

《Datos》

- Allende, Isabel (1982) : La casa de los espíritus. Plaza & Janes Editores, Barcelona.
- Baroja, Pío (1941) : Las inquietudes de Shanti Andía. Espasa Calpe. Madrid.
- (1966) : Cuentos. Alianza. Madrid
- Galdós, Benito Pérez (1950) : Fortunata y Jacinta -“Obras Completas V”. Madrid
- (1983) : Marianela. Alianza Ed. Madrid
- Martín Gaité, Carmen (1992) : Nubosidad variable. Anagrama. Barcelona
- Millás, Juan José (1992) : Primavera de luto y otros cuentos. Ediciones Destino. Barcelona.
- Mishima, Yukio(1988) : La perla y otros cuentos. Ediciones Siruela. Madrid
- Muñoz Molina, Antonio (1989) : Beltenebros. Seix Barral. Barcelona.
- “El País : Edición internacional”. Número 533, Lunes 9 de agosto de 1993, Año XI. Diario El País Internacional. Madrid
- Romero, Luis (1971) : La noria. Circulos de lectores. Barcelona.
- Puértolas, Soledad (1982) : Una enfermedad moral. Ed. Anagrama. Barcelona.
- (1988) : Todos mienten. Ed. Anagrama. Barcelona.
- Puig, Manuel (1988) : Cae la noche tropical. Seix Barral. Barcelona.

- Tamames, Ramón (1976) : Historia de Elio. Ed. Planeta. Barcelona.
Ueda, Hiroto (1987) : Análisis lingüístico de obras teatrales españolas (III), Textos e índice de palabras.
Universidad Nacional de Estudios Extranjeros de Tokio.
Unamuno, Miguel de (1986) : Niebla. Alianza Ed. Madrid.

電子化テキスト

- 《川上茂信編》 : M. Esqueva y M. Canatrerro (eds.) (1981) “El habla de la ciudad de Madrid. Materiales para su estudio”, C.S.I.C. Madrid.
《出口厚実編》 : “País Semanal”, Número 69, Domingo 14 de junio de 1992, Año XVII. Diario El País. Madrid.

《Bibliografía》

- Butt, John & Carmen Benjamin (1988) : A New Reference Grammar of Modern Spanish.
Edward Arnold. London.
Departamento de Lengua Española. Facultad de Filología. Universidad de Sevilla (1983) : Sociolingüística andaluza 2 : Materiales de encuestas para el estudio del habla urbana culta de Sevilla.
Harmer, L.C. & F.J. Norton (1935) : A Manual of Modern Spanish. University Tutorial Press. London
Kauffman, Donald (1973) : “Negation in English and Spanish” - Rose Nash (ed.) Readings in Spanish English Contrastive Linguistics. Inter American University Press, Puerto Rico.
Leonetti Jungl, Manuel (1990) : El artículo y la referencia. Taurus. Madrid.
Marsá, Francisco (1982) : Diccionario PLANETA de la lengua española usual. Ed. planeta. Barcelona.
Moliner, María (1966) : Diccionario de uso del español. Ed. Gredos. Madrid.
Porto Dapena, José Álvaro (1983) : Sobre la expresión Hace tiempo (que). - Serta Philologica e Lazaro Carreter. I, Ed. Cátedra. pp.485-504
Ramsey, Marathon Montrose (1967) : A Textbook of Modern Spanish. Holt, Rinehart and Winston. New York.
Rodríguez-Izquierdo, Fernando (1985) : “Procedimientos de topicalización en el habla culta de Sevilla” - Sociolingüística Andaluza 3, pp.31-63
Solé, Yolanda R. y Carlos A. Solé (1977) : Modern Spanish Syntax. A Study in Contrast. D.C. Heath. Lexington.
Voigt, Burkhard (1979) : Die Negation in der spanischen Gegenwartssprache. Peter Lang, Frankfurt am Main.
出口厚実 (1983) : 「節の統語型と叙法」 - *Hispanica* 27, pp.20-36.
Deguchi, Atsumi (1985) : “Proformas y variable lógica” - *Lingüística Hispánica* 8, pp.1-12
出口厚実 (1991a) : 「関係節と非関係節の狭間」 - 第11回 SELEK 口頭発表、於 Athleisure Club Hotel Heritage (埼玉県)、1991.08.26
Deguchi, Atsumi (1991b) : “Oración de relativo con núcleo interno” - *Lingüística Hispánica* 14, pp.19-24
出口厚実 (1992a) : “no sé qué + N を含む不定wh名詞句の文法性について” - *Estudios Hispánicos* 17, pp.33-43
— (1992b) : “スペイン語の不定wh表現について” - 大阪外国語大学論集 8, pp.1-18
— (1994) : 「スペイン語syntaxs辺境への旅」 - 関西スペイン語研究会第195回例会口頭発表、於大阪外国語大学、1994.12.26

(1995. 9. 1 受理)